

御移転がもたらしたもの

著者	木村 清孝
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	17
ページ	3-7
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000374



御移転がもたらしたもの

鶴見大学仏教文化研究所所長 木村 清孝

本日は雨模様の中を、このシンポジウムにおいていただきまして、まことにありがとうございます。先ほど主任の方からお話がございましたように、御本山總持寺の移転百年にちなみまして、当研究所では、三年間にわたり、それに関連する重要な問題を考えるという主旨で、シンポジウムを開いてまいりました。本日はその総仕上げの時にあります。四月から五月にかけて、神奈川県立歴史博物館のご協力をいただき、總持寺展を開催できましたし、また本年は、秋にかけて、御本山ではいろいろな行事が催されます。そちらにも是非ご関心をお持ちいただければと思っております。

本日、私がお挨拶を兼ねて、少しお話申し上げたいことは、大きな視野で横浜鶴見への本山の移転が何をもたらしたのか、そして現在抱えている問題は何か、これから期待されるものは何か、といったところでございます。

ごく簡潔に話の流れだけ「資料集」では書かせていただいておりますが、御移転の問題が生じてまいりました原因といたしましては、やはり明治維新による政治的な転換がまず挙げられるでしょう。とくに仏教界にとりましては、明治元年に出されました神仏分離令が大きい。但し、こういう名前の法令があったわけではございません。いくつかの法令を総称して、そのようにいつているわけですが、要するに、神道と仏教を融合的にとらえ、実際にそのような形で展開してきた従来の流れを止めて、はっきりと両者を分けようとしたわけです。それが、仏教界にとって大きな

衝撃であったことは確かです。しかし、同時に、それは仏教界に一種の覚醒をもたらしました。例えばその一つが、戒律観の修正でした。

日本の仏教は、それまで、具体的な戒律規定の一事をきちんと守るということには、あまり目を向けてきませんでした。仏教にはたくさんのお大師さんの大変厳しい戒律があるのですが、それらをそのまま守るということよりも、戒律の根幹にある、「仏心」といいますか、私たち自身のほんとうの心をしっかりと見つめるといいうことに重点を置いてきたのです。そういう中で、もう一回戒律を守ることの意義を見直して、坊さんたちも生活を正さなくてはいけないといった運動も起こったのです。

それから、新しい時代に対応して、制度や組織も、教えそのものや教え方も変えていかなくてはいけないということで、各宗派にわたって、制度面および教義面の改革運動も発生しました。

とくに、曹洞宗にとりまして大きな問題の一つは、御本山がそれまでにずっと続けておりました「輪番制」あるいは「輪住制」、すなわち、期限を切って住職が交代していくという形態から、「独住制」、つまり、ある人が住職（貫首）になったら、原則的には、それを生涯ずっと続ける、という形に変わったことです。明治三年のことです。それ以来、現在の江川禅師様まで、この独住制が続いております。

そういう中で、總持寺が明治三十一年に火事になって、大半を失います。以前からさまざまに議論されてきたことですが、これを直接のきっかけとして、第四代目の石川素童禅師の時に最終決断がなされまして、移転が決定いたしました。そして、明治四十四年に実際の移転の儀式、「還祖式」^{おくりな}が行われたのでございます。後に、移転の決断をされました石川禅師に対しましては、「中興」という諡が、特別に功績があったということで贈られております。

この時代に限ることではございませぬけれども、とくに宗教の世界には、大きな伝統があり、その伝統を守ること、しっかりと受け継いでいくことが大変重要です。しかし同時に、時代は変わっていきます。その中で、何をどのように

変えていくか、伝統と改革をどのように調和させていくか、両者にどのように折り合いをつけ、どのように改革を進めていくかということが、常に大きな問題になるわけでございます。

また、教義の面における近代化としては、例えば、『修証義』の編纂・流布があります。これは、現在も法要の折などによく読まれますので、ご存じの方もいらっしゃると思います。高祖道元禪師がお説きになりました『正法眼蔵』の中から、仏教の基本の教えをピックアップして、まとめあげた新しい経典です。言葉はほとんど全部『正法眼蔵』の言葉ですけれども、文脈的にはかなり違いのあるところから抄出され、つなぎあわされているので、こういう流れでいいのかと思われるところもないわけではございません。しかし、大変な苦勞をして、最終的には總持寺・永平寺両方の貫首の許可を得て、新時代の仏典としてまとめあげられたのが、『修証義』なのです。

では、御移転が大きく目指したものは何か。ただしそれは、都市の開教でした。この後、関係の資料をいろいろと紹介していただけるでしょうが、近代化が進む中では、人口が都市に集中していくという流れを生み出します。その文明化・都市化の流れに対応した、布教の拠点が必要である。このことが、御移転の一番大きな理由になったのではないかと思われます。

こうして御移転が実現したわけですけれども、伽藍が整備されるまでには随分時間がかかっております。明治四十四年に移転が行われますが、この時はわずかに放光堂とご住職がお住みになる場所が整備されていただけです。そこからだんだんに、整っていくという形になっております。

しかし、御本山は移転後、次々と新しい時代にあつた活動を進めていかれます。その大きな一つの柱が、本学の存在にもやがてつながってまいります、女子教育の推進ということでした。これは大正時代に入ってからでございますが、大正十三年に光華女学校という学校がまずでき、翌年、今度は五年制の鶴見高等女学校が設立されました。このことから、女子教育に大変力を注いだことが窺えます。因みに、このあたりのことは、先般、四月だったと思い

ますが、『神奈川新聞』で十七回にわたりまして、「鶴見が丘から」というシリーズが執筆されておりまして。今日お話ししの納富先生、関根先生、そして私、それに御本山の山口老師も分担して下さってできたものでございます。是非、それもご覧いただければと思います。

それともう一つ、社会福祉事業に進出していったということが、大きなものと見なされます。これは遡りますと、どうも大正三年あたりに石川素童禪師が、神奈川県会の願いを受けて、県立薫育院という社会福祉関係の教育施設に院長として招かれたというのが発端のようであります。さらに、その後の鶴見病院に相当するものを手掛けるようになりまして、それから大変興味深いのは、大正年間ですが、公益質屋、質屋さんですね、これを二つほど設置され、さらに母子寮を、これも現在残っておりますけれども、作られるといったことで、多方面にわたって、社会福祉事業にも力を注いでこられたということがあります。

また、教化に関しても、さまざまな方策がとられて、貫首があちこちに自らお出かけになって布教をするということも行われてきました。近年では、とくに日本仏教は先祖供養、先祖崇拜、そういう大きな流れがございますので、それに対応する形での葬祭の実行にも力を入れてきているという状況があります。

ともあれ、新時代に対応した、新しい宗教者、仏教者のあり方というものを模索しながら、御本山もその活動を展開してきたわけでございます。では、現在の時点で、とくに御本山に期待したいことは何か。それを私なりにまとめますと、まず一つは、こういう国際化の時代、グローバル化の時代の中で、国際部をもう少し拡充し、御本山内での位置づけもしっかりとしたものにして、その活動を広げてほしいということでございます。

それから、第二はやはり、地域貢献ですね。今はお医者さんが主に担っていらっしゃると思うのですが、もともとお坊さんが持っていた役割、「心の医師」としての役割を、とくに地域との結びつきの中で果たしていく、そういうことを是非進めていただければと思うのです。

第三には御本山の宗教活動と、本学園の教育・学問の連携を強めていってほしい。これには、確かに、なかなかうまく結びつけるのが難しいところがあります。けれども、本学園は小学校だけはございますが、幼稚園から大学院までを持っております。教育の一貫性がある学園ですので、この面の強化を図ってほしいということです。社会福祉事業関係の仕事も進めてきておられますので、それとのつなぎをつけながら、例えば、新しい形の、グループホーム的なあり方と、ホスピス的なあり方、仏教ではビハラーと呼んでおりますけれども、両者の壁を外して両者を結び付けるような場、一定以上の年齢に達した方々が、いわば活力を持って、前向きに生きられるような、そういう場と一緒に考え、作っていけないだろうかということ。さまざまな障害は法的にもございますが、是非そういう方向を模索していただきたいのです。

いずれにしても、御移転から百年も経ったことで、その百年後、次の百年をどうするかということが大きな課題だと思います。今日のシンポジウムが、次の百年をどう作り上げていくかということについての一つの示唆を与えるきっかけにもなればと、そのように願っております。

以上、序論的なお話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。